中日新聞（2021年8月25日付）
掲載記事は中日新聞社の許諾を得て転載しています。

共生へ 4403人の思い

東京パラ コロナ下の開幕

心のバリアー 除く機会に

「もしかしたら、僕たちが『障害者はできることが少ない』って決め付けているのかも」

東京パラリンピックに出場する全盲の陸上選手と合宿した実業団チームのメンバーは、宿舎内を一度案内しただけで、目が見えているように生活する姿に驚いた。

障害者を身近に知る機会があれば、理解のきっかけになる。四千四百人の選手が参加するパラリンピックはスポーツの側面だけでなく、その機会としても最適な舞台だ。

日本パラ陸上競技連盟の理事長で、日本福祉大大学院の三井利仁教授（五七）は「パラリンピックは見てもらって初めてすごさが伝わる。五輪以上に見てほしい」と言う。

一方でコロナ禍は、知る機会を小さくする方向に働いてきた。事前合宿で海外の選手たちと交流する機会はほとんどなかった。すべての会場で一般の観戦は原則中止に。歓声がない中で選手たちは義足で跳び、車いすで走り、片腕で水をかき、音と声を頼りにボールを蹴る。大会後に街で触れ合う機会もない。

そんな状況でも、選手たちは口々に「知ってほしい」と言う。パラ競技の面白さや、困難を乗り越えた意志の強さ、感染の不安とも闘ってきた努力の過程を。理解によって心のバリアーを取り除き、分け隔てなく暮らせる共生社会に近づくことを願っている。

交流の機会がなく、間近で競技を見られなくなった分、限界に挑む選手たちの躍動や喜び、悔しさを丁寧に伝えたい。目に留めた人たちの意識が変わるきっかけになることを願って。

（社会部・蓮野亜耶）

（許諾番号:20210827-26556）